

令和五年三月二十六日 於 大阪市立平野図書館 多目的室

宗匠 山村 規子  
執筆 木下 貴司

平野図書館連歌会 二十周年記念

賦朝何連歌 十二韻

表 発句 はたとせや祝ふ文庫風光る ふみくら

脇 集へや歌へ郷のうぐひす

三 見渡せばあふるるばかり花咲きて

四 ころもあらためいざやなりはひ

裏 一 旅は常巡る山河友ならむ

二 昔しのぶか伊勢のみやしる

三 月あかり虫の音しげき軒の下

四 取り入れ終はり残る稲株 あか

五 頬をそめ恋文開く雪灯り

六 君への思ひこころうらなし

七 早乙女の裳裾うるはし雲わきぬ

挙句 平野まもる野仏の笑み たじろの

句上 麻里 一 猛 三 令子 一  
規子 一 由美 二 貴司 一  
俳児 二 きよの 一

令和五年三月二十六日 於 大阪市立平野図書館 多目的室

宗匠 中 教美  
執筆 増田 真弓

平野図書館連歌会 二十周年記念

賦夕何連歌 十二韻

表 発句 はたとせや祝ふ文庫風光る ふみくら

脇 言の葉交はせ永き日の下 もと

三 降る雨にいつしかみやこ花満ちて

四 出で立つ人の足袋潔し いさぎよ

裏 一 物思ふ心をいかにうち捨てむ

二 庵のうちに恋しのぶ草

三 月清し名残を惜しむ後の朝

四 御諸山より古塚のぞむ みもろやま

五 なべて聞けたふとき宮のほととぎす

六 白雲眺め悟り開けり

七 風吹けば雲間の辺波きらめきて へなみ

挙句 絶えぬ流れの平らのの濠 ほり

句上 麻里 一 悠以 三  
教美 二 和央 二  
純一 三 まゆみ 一

令和五年三月二十六日

於 大阪市立平野図書館 多目的室

宗匠 小村 典央  
執筆 松田 絹代

平野図書館連歌会 二十周年記念

賦初何連歌

十二韻

〔学生座〕

表 発句 はたとせや祝ふ文庫風光る

麻里

脇 雨のあととなるあたたかき庭

典央

三 花満つる春の日和にはこばれて

拓未

四 白きわた雲山にかさなる

風音

裏 一 夏祭り火照る林檎に映る顔

瑚雪

二 二人をむすぶうしほのかをり

仁瑚

三 来ぬ人の文の答えを待ちわびて

拓未

四 星降る夜に交はずさかつき盃

瑚雪

五 月影は白膠木紅葉を彩らむ

仁瑚

六 蟋蟀鳴く旅先の宿きりぎりす

心澄

七 鴨川の魚見つめる子どもたち

風音

挙句 積み初む雪やよむ連ね歌

絹代

句上

麻里

一

風音

二

心澄

一

典央

一

瑚雪

二

絹代

一

拓未

二

仁瑚

二

令和五年三月二十六日

於 大阪市立平野図書館 多目的室

宗匠 光田 和伸

平野図書館連歌会 二十周年記念

賦山何連歌

十二韻

表 発句 はたとせや祝ふ文庫風光る

麻里

脇 花も月日の心知る色

和伸

三 密か雨集へる声の時過ぎて

美月

四 山はいかにと開け放つ窓

千恵子

裏 一 待ち待てる半ぞらたかく玉うさぎなか

順子

二 水さへ友の旅もみぢする

磊門

三 すすき野へ走り抜けゆくおもひ妻

嘉男

四 ささめ雪降る肩二人なり

美月

五 大和へと続くはうら道けもの道

千恵子

六 蕨を摘めば聞く寺の鐘わらひ

順子

七 きみはだれ春立つ雲に問はれたり

磊門

挙句 霞の中に湖は不言うみ ものはず

嘉男

句上

麻里

一

千恵子

二

嘉男

二

和伸

一

順子

二

美月

二

磊門

二